

Nocardia farcinica による肺炎および多発性脳膿瘍の一例

◎小柴 学¹⁾、山本 久美子¹⁾、渡辺 真理子¹⁾、佐野 克典¹⁾
沼津市立病院¹⁾

【はじめに】*Nocardia* は土壌、水など自然界に広く棲息する好気性の放線菌で、肺や皮膚および中枢神経系への感染報告がある。今回、本菌による肺炎を契機に脳膿瘍へ発展した症例を経験したので報告する。

【症例】70代男性。発熱、頭痛、めまい、嘔気、脱力を主訴に救急要請となった。既往歴は糖尿病、水疱性類天疱瘡で、治療としてPSLを服用中であった。

画像診断より肺炎と脳膿瘍または転移性脳腫瘍が疑われ、提出された喀痰と術中で採取された脳膿瘍検体から*Nocardia farcinica* が検出された。AMKとIPM/CSの投与が行われ、入院13日目にMEPMへ変更となった。その後、MINOの内服に切り替わり入院60日目に退院された。現在も定期的な画像診断とMINOを継続投与中である。

【微生物学的検査】喀痰のグラム染色では白血球に貪食された分岐を有するグラム陽性桿菌を多数認めたことから*Nocardia* を疑った。*Legionella* の選択培地に*Nocardia* が発育することが知られていることから、GVPC寒天培地(極東製薬)を選択培地として使用した。37℃、炭酸ガス培養で

2日目に黄色みがかかったカサカサした集落を認め、質量分析(VITEK MS)にて*Nocardia farcinica* と同定された。後日、脳膿瘍ドレナージより提出された検体からも同一菌種が検出された。

【考察】*Nocardia* は通常の培養では発育しにくく、グラム染色所見などを参考に培養期間の延長が必要となる。特に喀痰は常在菌の混入により発育が確認できないことを経験してきた。

今回、*Nocardia* の選択培地として、GVPC寒天培地を使用し、迅速に確定診断できたことにより、早期に有効な治療を開始することが出来た。

沼津市立病院 臨床検査科 055-924-5100(内線 2228)